

三岸節子 〈短歌ポスト〉 入選作品 (平成三十年前期分)

選者 小塩卓哉 (中部日本歌人会顧問)

【優秀作】

\* 白い花 (ヴェロンにて) \*

燃ゆるごと白き花瓶に白き花節子は白き炎となりぬ

犬山市 有本仁政

〈評〉「白」の語が一首の中で三回繰り返される。上句では絵画の描写を言葉で再現し、下句では、描き手の心情を比喻で表現している。一首全体で、白い花が燃えるというモチーフが展開されるが、そこに軽い矛盾があり、絵画に自らの情念をぶつけた節子の苦悩のようなものも伝わって来よう。

\* イル・サンルイの秋 \*

秋晴の日差し差し込む日和かな忙しい日々に立ち止まる勇氣

岐阜市 小寺律子

〈評〉「イル・サンルイ」は、パリのシテ島の隣に浮かぶ島。パリの情景から下句では一気に作者の現実へと飛躍している。そして、自分の忙しい日々の中で「立ち止まる勇氣」が必要だと言っている。絵画を見て、そのような思いがふつつつ湧いてきたのだろう。このような観念的連想こそが絵画鑑賞の醍醐味であろう。

\* 火の山にて飛ぶ鳥 \*

火の山に飛ぶ鳥のごと生き抜きし女の軌跡ここに記さる

名古屋市 玉置 恵

〈評〉「火の山にて飛ぶ鳥」は芥川賞作家芝木好子の小説のタイトルでもある。芝木は、工芸や美術に打ち込む女性と、それら芸術を通じた男性との恋愛を情感豊かに描くことで定評があり、この小説はまさに節子がモデルである。そのことがこの歌の背景にはあり、作家と画家の情念を重ねつつ絵画を鑑賞していると言えよう。

【佳作】

\*細い運河\*

過ぎし日の栄華を水面に揺らせつつ今は静かに時が行くのみ

岐阜市 小寺敏宏

\*アンダーソンの壺と小鳥\*

我が壺も二匹の鳥と部屋の中寒さに負けず生き生きと

一宮市 竹田さと子

\*スペインの白い町\*

町並みを丘の上から見下すとどこか楽しい白いつながり

一宮市 竹田義弘

\*小運河の家(1)\*

春初めくもりのまじる空の色鏡の中の淡い春空

今伊勢中学校 森千紘

\*静物\*

テーブルにぽつんと置かれたまるい物ころころがりゆかに落ちるな

名古屋市立藤が丘小学校 浅井慶太